

高齢化社会における体育・スポーツの役割と課題

藤原 健固

Physical Education and Sport in the Aging Society

Kengo Fujiwara

We Japanese are living in an unexperienced society that is constantly changing. The changing social structure through the future changes of the population structure in our society means the changing of the human being himself, and the cohesive relations of human beings are one of the biggest changes in the aging society. That is to say, the changing social structure may effect the changing human being himself.

The function of the human physical exercise has been showed as features in the historical process of human beings, and a change of the meaning of the human physical exercise must have occurred in the aging society. The function of physical education and sport in the aging society must be useful to the human being himself, not only to the productivity. This point is the new meaning of the human physical movement in the aging society. Human beings have to realize the function of the physical movement in actuality, not only as the possibility and the expectation of it. It is so important that the function of physical movement must be put into process, not only as a result of it. This means the problem of human nature.

Also, the function of the physical movement makes humans healthy in the aging society. The decline in physical health due to aging is unavoidable, and this problem leads the decline in spirit, and also in human relations. These problems have to be solved as a social problem.

According to these view points we have to take recognition of the increase aged in our social system and the sport for all. Everyone can enjoy the physical movement, and realize its effects. In short, it is to secure of pleasure of the physical movement. The question resolves itself into the three points(area service, program service, consultant service)from the view point of life time physical movement or life time sport in the aging society. Especially the consultant service must be secured in the aging society.

In this monograph, the author discussed only health problems with relation to the physical education and sport in the aging society. The physical movement is shown with its real meaning to the human being himself, especially in the homogeneous combination in the aging society.

1 はじめに

「身体運動を楽しむ、且つ健康に役立てる」というとき、楽しみにウエイトをおけばスポー

ツ(sport)であり、教育の一環として身体運動を使う場合体育(physical education through physical movement)であるとされる。しかし、ほんらい両者は一体であり帰一無二の関係にあ

る。そして、体育・スポーツは永い人類の歴史において時代と社会に対応した役割を果たしてきた。それは体育・スポーツが既存の社会制度の中に位置づけられてきたからである。

社会制度に変革を求める要素のひとつは、人口構造の高齢化現象である。すなわち、社会構成員の高齢化は、社会構造の変化をもたらす社会制度の変革を招来するのである。

今から35年後の2020年には我が国の65歳以上人口の総人口に占める比率は20パーセントを越えるものと推測されている。この事態は、わが国が今後のり越えなければならない大きな課題である。すなわち、人口構造の高齢化は社会そのものに大きなインパクトを与えるのみでなく、その構成員のひとりびとりに大きなかわりをもってくる。それは端的に言えば、健康の問題である。この古くて新しい問題を高齢化社会という新しい事態の中で考察するのが本稿の目的である。具体的には、以下の2点について扱う。すなわち、(1)人類史における身体運動の意義の変遷、(2)高齢化社会における体育・スポーツの新しい視点、である。

2 人類史における身体運動の意義の変遷

人間と身体運動の歴史は、古い。それは人間のみならず、動物すべてに言えることである。人間が社会的動物としてその歴史を創ってきた過程において身体運動は独自の意義をもってきた。

人類の歴史は幾つかの段階に分けられる。第一段階は自然のものを獲って食べた採集狩猟社会であり、第二段階は自然に手を加えるようになった農耕社会であり、第三段階は自然により手を加えるようになった工業社会である。そして、第四段階として我々は知識・技術の高度利用による脱工業社会を迎えている。

これを人間の結合関係でみると、初期の段階ほど同質結合が強く、人類史の発展は異質結合強化への歴史でもあった。そして、異質結合の強化は高田の「結合定量の法則」が示唆しており、現在その程度を弱め同質結合の要素を強

めようとしているのである。

そして、更に人口構造の観点から人類史をみても極くおおざっぱに言って初期の段階ほど年少人口比率が高く、人類史の発展は高齢人口比率の増加傾向として捉えられる。そして、とくに我が国においてこの傾向が著しく、それが同質結合の認識を新たにしているのである。

(1)採集狩猟社会

人間が自然に在るものをもって食べた時代、それは現在でも一部の種族（例えば、ブッシュマン）に認められるが、人間の結合関係は同質結合が最も強かったと思われる。それは集団の成員が共に協力して食物を獲得し、且つ外敵から身を守らなければならなかったからである。また、自然の脅威の前には無力であり、成員はひとりではなく群の一員としてのみ生存を許されたからである。

この時代において、人間の身体運動の意義は主としてその身体的能力そのものにあつたと思われる。それは植物を採集するにしても、動物を獲るにしても身体的能力の優劣が生存と直接大きなかわりをもっていたからである。とくに、動物を獲る場合、追いかけて、石で打ち、棒を投げ、また素手で捕えなければならなかった。こうした時、最も大切なことは早く走り、強い力で動物を倒し、運ぶ、といった身体的能力である。

まさに、身体的能力そのものが生産性をあげる要素であり、生存を左右したのである。それ故、身体運動は生命の絆であり、その意味で意義が大きかった。

その意義の大きさは、やがてそれが多くのスポーツの源流をなしたことから伺える。すなわち、動物を獲るために早く走る身体運動は後に走競技となって引き継がれ、動物に棒を投げて倒す身体運動は槍投競技に、また、直接動物を倒す身体運動はレスリング競技となって引き継がれている。

そして、同時に採集狩猟社会において人間の身体運動は同質結合を強め集団の団結を強めるうえで大きな意義をもったものと考えられる。それは2つの側面から指摘される。1つは余暇

時間の過ごし方であり、2つは同質結合強化の必要性である。

まず、余暇時間の過ごし方という点であるが、人類学者によれば、現在の採集狩猟民の余暇時間が予想外に豊かであることが報告されており、⁽¹⁾ サーリンズによれば「1人当たりの仕事量は文化の進歩にともなって増大し、逆に余暇時間は減少する」⁽²⁾ ことが指摘されているほどである。この豊かな余暇時間に、採集狩猟社会の人々が身体運動に興じたことは十分に考えられることである。それは他にすることがあまりなかったことと考え合わせると当然のことであると思われる。

つぎに、採集狩猟社会において身体運動が余暇活動として重視されたもうひとつの側面は、同質結合強化の必要性からである。自然の中であって弱い立場にある彼らにとって集団を離れて生活することは死を意味するものであり、集団の一員として寄り添って生活しなければならなかった。その際、身体運動は採集狩猟行為とともに余暇活動としても意義をもったのである。それは遊びやゲーム、さらにスポーツが本質的に集団維持機能(group maintenance function)をもっているからである。

こうして、採集狩猟社会において、身体運動は生産の側面で食物を獲得するという課題達成機能(task performance function)に直接かかわりをもった。一方、余暇の側面では集団維持機能にかかわったのである。

(2) 農耕社会

人間の歴史はその生産との関係でみる限り、自然に在るものをもって食べた採集狩猟社会から自然に働きかけ栽培して食べるようになった農耕社会に引き継がれてきた。

農耕社会において身体運動の意義は、主として体力の養成におかれた。とくに、農耕社会においては人間は定住し自らの体力を駆使して作物を栽培する必要があった。

他方、定住し且つ共同作業の要素が濃くなるにつれて人間と人間の結合関係は、同質性をより一層強めたものと考えられる。

こうして身体運動は、体力の養成と同質結合

強化の意義を課せられたのである。しかし、身体運動そのものが生命の維持を左右するほどの意味は、採集狩猟社会に比べれば高くない。

(3) 工業社会

工業社会は、自然的産物としての主として農水林産物といった第一次産品に手を加え付加価値をつけて富を確保することによって成立する社会である。

工業社会における身体運動の意義は、主として優秀な労働力養成にあり、且つ人間そのものへの機能的側面に向けられている。

優秀な労働力養成という意味では、従来の社会における身体運動の延長線上にあるが、工業社会のそれはより計算された歯車のひとつであり商品としての労働力養成にある。それ故、工業社会における身体運動は身体運動の技術そのものが生命を左右するというということでもないし、身体運動の技術そのものが生産性をあげるという性格のものでもない。すなわち、重量物をどれだけ持ち上げることができるかはそれほどの意味をもたないのである。このことは、重量挙げで100 kgを持ち上げることは極めて困難であるが、起重機はこれをいとも簡単にやってのけることをみれば明白である。

では、なぜ人間はこれほどまでに体力の限界に挑み、技術の向上に挑むのであろうか。これが身体運動のもっている人間そのものへの機能的側面でなければならない。その第1は、工業化によって分業化された仕事から受ける疎外の問題である。仕事の細分化は、人間にとって彼の能力の一部をのみ要求されることを意味する。人間は自己の能力の一部でもって、しかも全人格的接触をではなく自己の一部分のみをもって他との部分的接触を要求される。すなわち、異質性によって結ばれるようになる。さらに、それは課題遂行という旗の下でのみ維持されるに過ぎない。こうして、一時性と多様性の中で人間はやがて自己を失い他とのつながりを見失いがちになる。こうした疎外された状況に対し、汗を流し声を出して楽しむ身体運動が人間性を取り戻すべく要請されてきたのである。しかし、実際には人間性回復のための身体運動

も急激な工業化の過程では生産性を高めるためのひとつの手段の域を出るものではなかった。

その第2は、再創造(recreation)のための身体運動である。すなわち、工業社会の余暇は、労働に付随したものであり、労働による生産性をあげるために役立たせるべきものとして位置づけられてきた。それ故、余暇活動そのものは市民権をもたない。道楽という言葉のもつイメージは、このことをよく現わしている。

以上のように、工業社会における身体運動は生産性を高める優秀な労働力(しかも部品、パーツとしての)養成という色彩が強く、体育・スポーツもこの側面で位置づけられてきた。また、人間的側面への身体運動の機能的側面が強調されてきたけれども、それは生産性を高める範囲のものであり、且つ可能性・期待と結果としての機能を明確にし得ないままに楽観的に断定する、という誤謬を内包している。

しかしながら、時代の流れは工業社会から脱工業社会へと変化しており、それも高齢化という現象を背景にもっている。こうした新しい社会への転換に当って身体運動の意義そのものは、どのように位置づけられるであろうか。

3 高齢化社会における体育・スポーツの新しい視点

(1) 高齢化社会における体育・スポーツの役割

人間の身体運動の意義は人類史の過程で幾つの特徴を示してきたが、高齢化社会を迎えてその役割にひとつの転機が要請されている。⁽³⁾

高齢化社会とは、人口構造に占める高齢者人口の比率が高い社会のことである。このことは、既存の社会構造に大きな変革を求めることになる。

さらに、このことは工業社会から脱工業化社会への移行と軌を一にしている。すなわち、高齢化社会は産業の基盤のうえにヒューマニズムが実現される社会を指している。それは一言すれば、生産性に対応した人間からヒューマニズムに対応した人間への移行を意味している。更に言えば、人間が物と向かい合った状態から人間と向かい合った状態への移行を指している。

こうした移行の中で、社会システムに高齢者が位置づけられるのである。

それ故、高齢化社会における身体運動の役割は、こうした移行に対応するものでなければならない。それは工業社会における生産性との関係で捉えられたり、そのための方便として利用されたりするものであってはならない。真に人間性に役立つものとして位置づけられなければならないし、この点にこそ高齢化社会における体育・スポーツの新しい役割が認められるのである。それは従来の可能性・期待としての体育・スポーツを真に結果として現実のものとすることを意味している。

それ故、高齢化社会における体育・スポーツの意義は、身体運動の結果そのものよりもその過程で得たものに価値がおかれる。すなわち、100メートルを10秒を切って走ること、そのことは人間の挑戦という意味を除いて、速く走ること自体は生産性を左右するほどの意味をもたない。重要なのはその目標到達に到る過程で何をどれだけ得たかにかかっている。その過程で得た量と質、それが大きな意義をもっているのである。このことは、人間性の問題を指しており、体育・スポーツがその役割として厳に認識しなければならない側面である。

さらに、高齢化社会において体育・スポーツがその役割として要請される側面は、健康の問題である。従来も人間の身体運動は、健康とのかかわりをその重要な役割としてもってきたのは事実である。しかし、高齢化社会においては高齢者が社会構成員に占める割合が高く、この観点からも健康の問題は社会政策上の課題を提供することになる。また、社会の進歩発展は社会構造と機能の複雑化と裏腹の関係にあり、このことから健康の問題はより重視されなければならない。

まず、前者について言えば、人口構造に占める高齢者比率の増大は加齢による健康の問題を提起せざるを得ない。すなわち、加齢による身体的健康の減退は不可避であり、自分が自分どのようにコントロールするかという精神的健康に問題を生じ、さらに自分と他との関係をど

のようにコントロールするかという社会的健康にも大きな問題を投げかけるものとして浮上せざるを得ないのである。これらの問題は、高齢者人口比の増大に伴って社会全体の取組みを要求する性質の問題である。

そこで、体育・スポーツのもつこれら3つの側面に対応する役割が再認識されなければならない。それは体育・スポーツが人間の身体的健康に有効に働き、精神的社会的健康にも力を発揮し得るからである。それは、主として次の事情に負っている。

まず、身体的健康に及ぼす体育・スポーツの機能は、発達過程に応じた適度の身体運動が身体的健康の維持・増進に役立つことに求められる。それは「筋肉は適度に使われれば強くなり、使われなければ弱くなる」という表現に集約される。しかし、身体的健康に対して身体運動がその維持・増進に機能するといっても、加齢による影響力の前にはその機能は微々たるものにすぎない。しかし、このことを認めても、身体運動が加齢過程において、とくに予防医学的見地からも、大きな機能を果し得るのである。

つぎに、精神的健康に及ぼす体育・スポーツの機能は、主として汗を流し声を出して身体運動を楽しむ、ことに負っている。すなわち、汗を流し声を出して身体運動を楽しむ時、人間は“開かれた心”の状態になり、日々の前かがみの姿勢で何かに耐えるかの如く黙々と歩む“閉ざされた心”から解放されるのである。こうした“開かれた心”を確保することこそ、自分が自分をコントロールし得る力を獲得する前提条件である。汗を流し声を出して身体運動に興じる時、“自分”を取り戻しているのであり、このことが体育・スポーツの魅力のひとつなのである。

さらに、社会的健康に及ぼす体育・スポーツの機能は、主としてスポーツマンシップと情報処理能力に根ざしている。すなわち、ルールを守り、相手を尊敬し、チーム・ワークを保ち、ベストを尽す、といったスポーツマンシップの内容の獲得は、自分と他の人間との間をコントロールするキである。また、情報とのかかわ

りからみる時、身体運動は増々増大する情報の生産と消費にまつわる人間の対応の仕方を暗示している。すなわち、身体運動は「自ら情報を収集し、判断し、実行し、結果が完全であることを目指すものであり、しかもこれらの処理がほとんど瞬時に要求される」という意味で情報と人間の関係を具体的に形で見せるのである。そして、この点に身体運動の魅力のひとつが認められるのである。すなわち、身体運動の場における情報の処理は、生活の場で「自ら情報を集め、判断し、実行し、結果に責任を持つ」主体的人間の育成に大きなかかわりをもっているのである。それ故、スポーツマンシップを体得し、情報とのかかわりのなかで主体性をもって思考・行動し得る人間こそ、社会的健康の基盤なのである。

以上の観点から、高齢化社会における体育・スポーツの役割は、従来の生産性を高めるための手段に傾頭した体育・スポーツから真に人間性に対応した体育・スポーツでなければならない。それは、異質結合を強めるための体育・スポーツから同質結合を強めるためのそれを指しており、この点にこそ高齢化社会の体育・スポーツの役割が蔽に位置づけられることが認識されなければならない。

それは具体的には、社会システムに占める高齢者比率の増大という認識と、従来のエリート志向から“みんなのスポーツ”(sport for all)志向への認識という2つの側面をもっている。

(2) 高齢化社会における体育・スポーツの対応

人口構造に占める高齢人口比の増大と、みんなのスポーツ志向は、誰でも楽しく身体運動に親しみ、その効果に浴する、ことを意味している。それは一言すれば、楽しさの確保である。生涯スポーツの観点からその楽しさを確保するために、以下の点に注意を払うことが肝要である。

(1) エリア・サービス

施設づくり、という観点から従来のそれは教育的且つエリート志向のもとにつくられる傾向を否定し得ない。そして、それは4つの側面から明らかである。

第1に、学校体育施設においてそれは教育の名のもとに規格化され、規格に生徒・児童が合わせる式思想のもとにつくられてきた。また、社会体育施設においても一点豪華主義的色彩が強く、国際競技でも実施し得る程の規格化された施設を誇るという傾向が認められる。住民はそうした高次元のレベルでつくられた施設を使い切ることが出来ないばかりか、それから生ずる不便さをも許容しなければならない。

第2に、こうした規格化された施設づくりは豪華ではあるが、体育・スポーツ施設として楽しさを確保するという観点からは豪華すぎる。というのは、これらの施設が体育・スポーツ利用以外にも各種の行事に利用されることを前提に設計されており、その部分の機能は体育・スポーツ施設としては不要なのである。

第3に、とくに社会体育におけるこうした一点豪華主義的な施設は、全体のバランスという観点から問題を提起している。すなわち、利用者の側から言えば、乗物に乗って出かけ乗物に乗って帰らなければならない。それは点と線的思想に基づくものであり、大多数の地域住民の利用に応えることができない。それは単に交通上の問題だけでなく、収容人数の上からも住民の要求に応えられるものではない。すなわち、利用したいけれども不便であり、且つ利用したいと望むものがすべて利用できるとは限らないのである。

第4に、こうした施設の管理・運営上の問題が指摘される。すなわち、これらの施設の管理・運営は、規則に制約されたものであり、利用者はその範囲内でのみ利用が許されるという問題である。それは端的には利用時間、管理・運営の権限に現われている。双方ともに施設側で決定した規則に縛られ、利用者の“自由”は極めて少ない。このことは、利用の内容と巾に大きな制約を意味するものである。

以上の諸問題を従来の体育・スポーツ施設は抱えている。それは体育・スポーツが異質結合に対応したものであったことから当然の帰結である。すなわち、体育・スポーツを人間の能力判定のひとつの有力な手段と捉え、その能力を

判定する場として規格化された施設が不可決であったのである。それ故、公式大会に耐える施設でなければならず、また他の市町村に誇れる施設でなければならなかったのである。

しかし、こうした施設づくりの思想からは住民の誰もがスポーツを楽しむことを確保することは、易しいことではない。高齢者を含めて、また技術的にそれほど高くないものを含めて、さらには家族でスポーツを楽しむといったみんなが楽しくスポーツに親しみその効果を得るために、次のような施設づくりのうえからの対応が要請される。

第1に、体育・スポーツ施設の一点豪華主義を避け分散して整備・拡充することの重要性が指摘される。それは車で出かけて行って車で帰ってくる“点と線”の施設から、歩いて出かけて行って身体運動を楽しみ歩いて帰ってくる“面”の施設確保を意味している。具体的には、小学校区の中に住民がスポーツを楽しむことの出来る場を確保することである。それは小学校を中心とする学校体育施設、企業スポーツ施設、および地域内の運動施設によって構成される。とくに地域内の運動施設、とりわけ公共社会体育施設の充実、一行政一施設といった一点豪華主義から、利用し得る程度のものを分散して各小学校区域内に確保することが重要である。

第2に、管理・運営面における住民参加が指摘される。施設側の規則に縛られた従来の管理・運営のもとでは、利用時間をはじめ利用者の受ける制約は大きい。そこで住民参加を採り入れることによって、施設の利用時間の延長、および各種施設の効率的利用などを計ることができる。そのためには、住民の代表と施設側において協議会を結成し、施設側の管理・運営に伴う権限を可能な範囲で住民側に委譲・委託する措置が必要となる。

第3に、規格化を柔らげ、誰にでも利用し得る施設・器具の整備・拡充の必要性が指摘される。とくに、高齢者や年少者の利用に耐える柔軟な配慮が必要である。

(ロ)プログラム・サービス

いつ、どこで、何を、どの程度、どのような

方法でスポーツを企画・提供するかがプログラム・サービスであるが、とくに、活動プログラムの吟味と直接民主主義型プログラムの推進が肝要である。それは、本来プログラム・サービスの基本理念が参加者の意志の尊重にあるからである。

とくに、高齢化社会においては生涯スポーツ(life-time sport)の観点から高齢者、年少者、および体力・技術をそれほどもたない人々に対応したプログラム・サービスの確立が求められる。それは汗を流し、声を出して誰もがスポーツを楽しめる内容のものでなければならない。そのためには、(i)楽しさの確保、および(ii)スポーツ活動を生涯の一環として捉える、必要がある。

(i)楽しさの確保

まず、楽しさの確保を図るためには2つの要素を満たさなければならない。ひとつは、プログラム自体の内容にかかわる要素であり、それは無理のないプログラム・サービスであることを指している。従来のプログラム・サービスはともすると完成されたスポーツ志向が強く、参加者との間にギャップが大きすぎる傾向を否定し得ない。ルール・ブックに記載されている正規の規則にこだわる傾向は、参加者の体力・技術とのギャップを産み、楽しさを確保するまでに至らない嫌いがある。それはあたかも、既製の規格化された靴に足を合わせる、といった矛盾を意味している。

そこで、参加者の体力・技術を背景にした欲求(need)に応じたプログラム・サービスが要請される。そのために、ルールの弾力的運用があげられる。それはルールを参加者の必要性に応じて改変することを指している。例えば、バレーボールで言えば、ネットの高さを規則よりも低くするとか、軟かいボールを使うとか、人数を増やすとか、といった工夫があげられる。

さらに、参加者の欲求に応じた新しい種目の開発が要請される。

こうしたルールの弾力化およびニュー・スポーツの開発とともに、楽しさの確保はプレイそのものに如何に対処するかという側面をも合わせもっている。それはスポーツをするための

体力・技術はスポーツを楽しむ手段であることを意味している。チャンピオン・スポーツの場では、技術の向上、完成が目的とされるが、生涯スポーツの場では現在身につけている技術を通してプレイを楽しみ、楽しむ過程のなかで技術の向上を図る姿勢が要請されるのである。同時に、プレイの場での平等のチャンスを確保することがプレイの楽しさ確保にとって重要である。スポーツはもともと公正な判断が可能な環境のなかで、自己の、または自己の所属する集団の他よりも、秀れていることを証明する意味をもっている。この優劣判断を競う場合、プレイ以前に結果が判っているような場合には楽しさは半減されたり苦痛にさえなり得る。それ故、勝敗のチャンスを平等にする工夫が要請されるのである。それは能力の平等化(能力別、能力の高いものと低いものでのペア、など)による勝利獲得の平等のチャンスを意味している。

(ii)生涯体育の一環としてのスポーツ

プレイに伴うスポーツの楽しさは、生涯を通じての身体運動の意義に対応するものである。それは広い意味での健康に対応したものであり、楽しさを背景にしてはじめて意味をもつ。そのためには、生活に根ざしたスポーツが必要であり、そのための環境が要請される。

まず、生活に根ざしたスポーツについては、次の点が要請される。生涯教育の基本のひとつは、身体運動の生活化である。日常生活の中に身体運動が採り入れられ、生活の一部として身体運動を楽しむことが生涯に大きな意味をもつのである。1960年代以降の余暇と所得の増大は、余暇にスポーツを楽しむその恩恵に浴する可能性を拡げ現実のものとした。しかし、高齢化社会においてはひろく健康問題を従来以上に社会全体の問題として捉えねばならず、この次元で生活に根ざしたスポーツの果す機能が求められる。

つぎに、スポーツの環境づくりについては、次の点が指摘されなければならない。すなわち、生活の一部としてのスポーツの生活化を計る場合、容れ物(場)としての施設づくり(エリア・サービス)とともに内容としての対応(プログ

ラム・サービス)が重視されなければならない。

(イ)コンサルタント・サービス

施設づくりとプログラムの充実とともに、プレイに伴う指導・相談の充実が計られなければならない。指導者の確保の問題である。それは、プレイそのものの指導を受けもつ実技指導者と、健康とか体力についての指導者に大別される。

まず、実技指導者については、次の点が肝要である。実技指導者は何よりも指導する種目について知識・技術に秀でていなければならない。と同時に種目独自の特性から生じる楽しさを体得していることが重要である。例えば、バレーボールは他種目にはない独自の特性をもち独自の楽しさに裏打ちされている。そして、特性と楽しさを伝える技術(指導法)を身につけていることが前提である。

この意味で実技指導者はエキスパートでなければならない。しかし、さらに大切なことは、指導が人間そのものに対する深い洞察に基づいていることである。

つぎに、健康・体力についての指導者については次の点があげられる。医師、スポーツ・マッサージャー、心理学者などによる体力診断、運動処方が中心となる。この分野の指導者の充実こそ、今後の高齢化社会におけるスポーツの生活化に欠かせない。

(ロ)事故の防止と保険

スポーツに事故はつきものである。それはプレイが主として身体を使って勝敗を競うことから必然的に生ずるいわば不可避の危険を内包しており、参加者の危険の同意を前提にしているからである。すなわち、危険の予見義務、回避義務を守ったうえになお不可抗力としての事故を避け得ないのである。それ故、こうした場合の事故は刑法第35条の正当行為としてその違法性は一般に問われない。

しかしながら、指導上の過失は時として刑法第209条の過失傷害罪、および刑法第211条の業務上過失致死罪に問われる。また、民事責任を追求され賠償責任(民法第715条)、不法行為責任(民法第709条)などに問われることも覚

悟しなければならない。さらに、施設上の過失(構造上の欠陥——設計、施行、老朽化など)、および管理上の過失(操作のミスなど)も追求され得る(国家賠償法第2条、民法第717条)。

こうした刑事・民事責任の追求の風潮は、そのこと事体の良否とかかわりなく増大の傾向にある。⁽⁴⁾それが社会的風潮である。それ故、スポーツには事故がつきものであるとは言っても、事故防止と事故発生後の適切な処置が不可欠である。

そのひとつの方策として、事故発生に対応した補償対策を講じておくことが必要である。それは現在のところ管理者賠償責任保険、施設保険、傷害保険といった保険制度に基づいた補償対策と見舞金制度に基づく補償対策に大別される。

しかしながら、今後の指針として力を注ぐべき点は、ボランティア活動としての場で生じた事故に対しても制度的に補償対策を確立することである。

4 おわりに

以上、高齢化社会における体育・スポーツの役割と課題についてみてきた。今後、我が国がのり越えなければならない大きな課題は、人口構造の高齢化による社会変動への対応である。とくに、その際、高齢者を社会システムにどのように位置づけるかが問題である。具体的には、高齢者の役割、税金・貯蓄体系、労働、雇用体系、福祉、健康、といった問題を避けてとおることはできないのである。

本稿では、高齢化社会における健康の問題との関係で体育・スポーツの役割と課題を考察したに過ぎない。

注・文献

- (1) サービスによれば、或るオーストラリア原住民の労働時間(男の場合、狩りとその準備に使う時間、女の場合、植物採集と調理に使う時間)は、男性1日3時間50分、女性3時間44分である。(「現代体

育・スポーツ大系」Vol.1, 講談社, 1984, p.245)

- (2) 同上。
- (3) ここで高齢化社会というのは、人口構造に占める高齢者人口比の高まりを余儀なくされる脱工業化社会を背景にしている。
- (4) 例えば,三重県津市の子ども会裁判に象徴される。